

京都大学言語学懇話会  
2022 年度 発表要旨

## 例会報告

### 第 117 回例会

日時・場所 2022 年 4 月 16 日（土） 13:30 ～ 16:45 於 Zoom  
発表題目 ベトナム語北部方言の韻の音韻的解釈：実験音声学的観点から  
山岡 翔（大阪大学／日本学術振興会）  
主観的表現でわたしたちは何をしているのか？  
—コミットメント概念によるコトダ構文の分析を通して—  
田村 早苗（北星学園大学）

### 第 118 回例会

日時・場所 2022 年 7 月 9 日（土） 13:30 ～ 16:45 於 Zoom  
発表題目 モンゴル語アラシャ方言における軟口蓋阻害音の閉鎖の有無から  
見る脱オイラト語化  
外賀 葵（内モンゴル大学（中国））  
言語学は対話 AI の役に立つか  
浅尾 仁彦（情報通信研究機構）

### 第 119 回例会

日時・場所 2022 年 12 月 10 日（土） 13:30 ～ 16:45 於 Zoom  
発表題目 周辺言語との比較により明らかになったパイワン語の語彙的接頭  
辞の特徴  
大谷 青渚（京都大学大学院）  
統語論と失語症  
岡田 理恵子（国際医療福祉大学）

## ベトナム語北部方言の韻の音韻的解釈： 実験音声学的観点から

山岡 翔

ベトナム語（ひいては同類型の孤立語一般）においては音韻分析が研究者によりかなりの程度異なるという、音韻研究上の根源的な問題がある。ベトナム語は一音節が一形態素に基本的に一致するような孤立語なので、この言語における音韻分析は音節の音素的切り分けを考えることと同等である。そして、上述のような音韻的解釈上の問題点は、音節の内でもとくに母音・末子音・声調など複数の構成素が詰め込まれた単位である韻部に集中する。

このような音韻的解釈の不一致が生じる背景には、連続的音声を音声記号により離散的に表記する作業（音声表記作業）を従来の研究者がもっぱら聴覚印象に頼り主観的に行っていたことにあると思われる。音声は概括すれば「質」と「時間」からなる連続関数ととらえられるので、音声表記作業を厳密化するには「音声の質を評価するための質的基準」および「単音の境界を評価するための時間的基準」のふたつが必要である。

ここで、ベトナム語の音韻的環境は一音節内にすべて網羅されるので、この言語では音節構成素のバリエーションを網羅した単音節語リストを読み上げてもらうなどすることで、非常に効率よく音節単位の音声データを収集することができる。このようにして収集した単音節読み上げ時の音響データをもとにすると、北部方言の音節において頭子音と韻は時間的に独立しており、韻は等時的にふるまう傾向をもち、さらに韻の内部は時間的に 3 分割されるという時間的特徴が浮かび上がる。よって、これらの特徴をもとに音節の時間的構造を仮定することで上述の時間的基準を担保することができる。また、質的基準については音響・生理的に音声の諸相を数量化したデータをもとに、ある区間における音色を「相対的に」比較することで担保することができる。

本発表では上述のような質的基準・時間的基準という道具立てをもちいて、下降二重母音後部要素や介音といった音韻分析上の問題を含む分節音をとりあげ、音声情報から音韻情報について検討する実例を紹介した。このような音節基調の孤立語の音韻分析に関する実験的手法は、同類型の他言語一般にも適用する余地があると考えられる。

(やまおか しょう)

## 主観的表現でわたしたちは何をしているのか？ —コミットメント概念によるコトダ構文の分析を通して—

田村 早苗

本発表は、現代日本語の「節+形式名詞「こと」+コピュラ」という構文（以下、「コトダ構文」と呼ぶ）について、談話更新に関する特徴を指摘したうえで、「コミットメント」概念にもとづく意味論的分析案を提示した。対象としたのは(1)および(2)の2種類の用法である。

(1) 「感心・あきれ」の用法

- a. よく間に合ったことだ。
- b. 10歳にして大人顔負けの強さですから、将来が楽しみなことですね。

(2) 当為的用法

- a. 暗くならないうちに帰ることだ。
- b. 家族が大切ならば今すぐやめることですね。(現代日本語書き言葉均衡コーパス)

発表ではまず、コトダ構文の両用法について、談話情報の更新という側面に関わる共通する特徴として以下の3点が見られることを観察した。

(3) コトダ構文「p-コトダ」に共通する特徴

- a. 「pである」という判断は発話時の話し手による判断であり、発話時点において新たに示された、まだ共通基盤には含まれていないものである
- b. 「p コトダ」という発話によって話し手と聞き手の共通基盤が即時に更新されることはない
- c. 「p コトダ」の p は判断主体によって真偽が変わり得るような主観的内容を表す

共通基盤 (Common Ground) を話し手—聞き手の相互信念にもとづいて捉える立場（「信念ベース」の分析）から見ると、(3a)と(3b)の特徴についてどのように分析するかは問題である。というのも、話し手が自らの判断を伝達しながら、相互信念の更新は回避するという方法が不明であるためである。

このような問題点にもとづいて本発表では、信念ベースではなく「コミットメント」という概念にもとづいて共通基盤や談話情報の更新を捉える立場を採用した。この立場では、発話は話し手や談話参加者のコミットメントを操作する役割を持つ。「コミットメント」という概念自体の捉え方にはまだ議論の余地があるが、本発表では「pをコミットメントとする」主体は、「pであるという前提のもとに行為する」立場をとるという暫定的な概念を用いた。

そのうえで、本発表ではさらに話し手個人にかかわる「私的コミットメント」と、談話参加者という集団にかかわる「社会的コミットメント」を区別することがコトダ構文の分析に有用であるという提案を行った。pを私的コミットメントとして話し手が表明した場合、pは話し手自身の行為のみを左右する前提とされるのに対して、pを社会的コミットメントとして表明した場合、pは聞き手も含めた集団の行為を左右する前提として提示されたことになる。この区別を導入したうえで、コトダ構文「p コトダ」は「pは話し手の私的コミットメントである」ことの表明を表すという分析を主張した。

(たむら さなえ)

## モンゴル語アラシャ方言における軟口蓋阻害音の 閉鎖の有無から見る脱オイラト語化

外賀 葵

モンゴル語アラシャ方言（以下、アラシャ方言）とは、主に中華人民共和国内蒙古自治区阿拉善盟に居住するモンゴル族によって話されるモンゴル語の一変種である。アラシャ方言は、モンゴル諸語のうち、元来オイラト系諸語（以下、オイラト語）に属するが、内モンゴル諸方言の影響を受けた結果オイラト語的特徴の一部を失った、中間的な言語であると考えられる。しかしながら、脱オイラト語化がどのように実現しているかについて、従来具体的には論じられておらず、とりわけ社会言語学的・通時的観点を含む記述が不十分である。本発表では、アラシャ方言に保持されるオイラト語的特徴の一つであると言及される軟口蓋阻害音を対象に、閉鎖ありで実現する（＝オイラト語的である）か、閉鎖なしで実現する（＝オイラト語的でない）かという基準によって脱オイラト語化（脱閉鎖音化）について考察を加える。発表者の調査データに基づく外賀（2021）、Geka（2022）を紹介し、新たに格日勒图 [ゲレルト]（2018）のデータに基づく社会言語学的観点からの分析結果を報告する。

外賀（2021）は、10代から80代のアラシャ方言話者8名を対象に実施したテキスト読み上げ調査のデータに基づき、モンゴル祖語の \*k に遡るアラシャ方言の軟口蓋阻害音 K が本来想定される閉鎖音よりも摩擦音で実現しやすい傾向にあることから、モンゴル祖語の \*k, \*q の摩擦音化の過程において、アラシャ方言が1つの中間的な段階にあることを示唆する可能性があるとして述べた。また、この脱オイラト語化の現象は、世代別に見れば60代以上よりも50代以下の話者、語内の位置別に見れば語頭よりも非語頭、後続の母音別に見れば i の前よりも e の前および ü, ö の前で実現されやすいという傾向を示した。

Geka（2022）は、60代のアラシャ方言話者1名を対象に実施した孫竹（主編）（1990: 744-768）の語彙索引（モンゴル文字、約3000項目）の読み上げ調査に基づき、その調査データと孫竹（主編）（1990）のデータとの比較を行うことにより、通時的観点から、脱オイラト語化が、語内の位置別では語頭よりも非語頭、後続の母音別では i の前よりも e の前および ü, ö の前で実現されやすいという傾向を示した。

外賀（2021）では世代差に言及したものの、十分な社会言語学的分析には至らなかったため、アラシャ盟の42地点の各話者のデータを収集した方言地図集である格日勒图 [ゲレルト]（2018）の語彙データを用いて、話者の属性に関しては年齢、地域、性別の3つ、語における環境に関しては語内の位置と後続母音の2つの項目別に整理し分析を行った。その結果、まず世代差、地域差、性別差については、脱オイラト語化において性別差による影響は殆ど見られない一方で、世代差と地域差による影響はより強いものであることが示された。語における環境については、脱オイラト語化が、語内の位置別に見れば語頭よりも非語頭、後続の母音別に見れば i の前よりも e の前および ü, ö の前において実現されやすいという傾向を示しており、外賀（2021）、Geka（2022）を支持する結果が得られた。ただし、格日勒图 [ゲレルト]（2018）の語彙データでは、後続母音別の割合の差がそれほど顕著でない点や、世代差、地域差、性別差の影響に相互作用が見られるかという点については今後の課題としたい。（げか あおい）

## 言語学は対話 AI の役に立つか

浅尾 仁彦

本発表では、情報通信研究機構 (NICT) データ駆動知能システム研究センター (DIRECT) において開発している介護支援対話システム MICSUS について、その目的、機能、開発プロセスを紹介するとともに、その開発において言語学の知見がどのように生かされるかについて議論した。

MICSUS は、高齢者の健康状態等を把握して介護プランの立案を行う「ケアマネジメント」と呼ばれる業務を支援するため、高齢者に質問を行い、その結果を記録していくシステムであり、介護従事者の負担を軽減するとともに、介護の質を向上させることを目指している。MICSUS は、介護支援に必要な情報収集という明確な目的があるため、基本的には人手で書いたシナリオに沿って対話が進むように作られているが、DIRECT で開発している雑談対話システム WEKDA 等を用いた雑談も可能である。DIRECT では、MICSUS と対話するユーザの発話を深層学習モデルを用いて適切に解釈するため、大規模な言語データの構築を行っている。

MICSUS は人手で作成した文法や辞書は基本的に必要としないが、MICSUS の開発の過程で言語学的知識はしばしば有用である。本発表では、言語学的知識が生きる例として、対話における前提の失敗 (*presupposition failure*) や挿入連鎖 (*insertion sequence*) を扱う必要のある事例を挙げた。例えば、「お医者さんの指示通りお薬を飲んでいますか？」という MICSUS の質問に対して、通常であれば Yes あるいは No に相当する応答が期待されるが、ユーザは「お薬をもらっていない」や「どのお薬のこと？」のような発話をする可能性がある。前者は前提の失敗、後者は挿入連鎖の一部と見なせる。これらの事例を対話システムが適切に扱うための言語データの作成やシナリオの設計において、言語学的知識は指針を提供することができる。

**謝辞** MICSUS は総合科学技術・イノベーション会議の戦略的イノベーション創造プログラム (SIP) 第二期「Web 等に存在するビッグデータと応用分野特化型対話シナリオを用いたハイブリッド型マルチモーダル音声対話システムの研究」(管理人: NEDO) によって開発されたものである。

(あさお よしひこ)

## 周辺言語との比較により明らかになったパイワン語の 語彙的接頭辞の特徴

大谷 青渚

本発表では台湾原住民諸語のひとつであるパイワン語の語彙的接頭辞 (Lexical Prefix: LP) の特徴を報告した。語彙的接頭辞とは「動詞語幹を形成するために生産的に用いられるもので、拘束形態素・自由形態素のどちらにも付くことができ、「死ぬ」「煮える」「走る」「叩く」などの具体的な動作や出来事を表すことのできる接頭辞」(Nojima 1996: 1) である。語彙的接頭辞はブヌン語、ツォウ語、シラヤ語、サアロア語など台湾中部の台湾原住民諸語で研究が盛んであるが、パイワン語の語彙的接頭辞に関する先行研究は管見の限り存在しない。しかし発表者は上記の Nojima (1996: 1) の説明や、先述の言語とパイワン語の語彙的接頭辞の比較より、パイワン語にも語彙的接頭辞と呼べるものは存在することをまず示した。パイワン語の語彙的接頭辞の例としては masi-「持ってくる」、pi-「置く」、s<əm>a-「行く」などが挙げられる。しかし同時に台湾中部で話されている台湾原住民諸語の語彙的接頭辞の持つ特徴 (a)(b)(c) をパイワン語はほとんど有していないことを本発表で明らかにした；a) 類別接頭辞用法を持つ、b) 一致接頭辞用法を持つ、c) 1 語内に 1 つのみ語彙的接頭辞が付く。まず (a) は語彙的接頭辞の持つ用法の一つで、「語彙的接頭辞が語根の動作がどのようにおこなわれるかをあらわす」ものである。例えばツォウ語 (土田 1989: 18) の ti-kamrosə「手で (LP) - ひったくる」の ti- の用法をこう呼ぶ。(b) も語彙的接頭辞の持つ用法の一つで、「統語的本動詞である V1 に補助動詞 V2 の一部がコピーされて形式的・意味的な一致を見せる」ものである。紙幅の都合上簡略化して例を示すが、ブヌン語 (Nojima 1996: 17) の kis-asu-a=s (LP(stab)-immediately-LO=OBL)...kis-laupa (LP(stab)-stab) のように kis-の部分が V1 と V2 で共通の形式・意味となっており、このような用法を一致接頭辞用法と呼ぶ。(c) は上述の言語すべてに見られた特徴であるが、パイワン語では mi-k<əm>asi-Timur-an (k<əm>asi-「～から来る (LP1)」、mi-...-an「～のふりをする (LP2)」)「三地門 (Timur) から来た人のふりをする」のように語彙的接頭辞が 1 語内に 2 つ出てくることも可能である。

以上、周辺言語との比較検討より、パイワン語の語彙的接頭辞は上述の (a)(b) のような用法を持たず、(c) に関しては「1 語内に語彙的接頭辞は 1 つのみ」という制限をパイワン語は持たないことを示した。

今まで報告のあった言語は先にも述べたように台湾中部に集中しており、発表者はこれらの特徴は地理的なものであると暫定的に考えている。しかしパイワン語における動作の様態のあらわれ方や、語彙的接頭辞がどのような品詞の語根に付くかなどさらに詳細な分析を行うことで、先行研究の言語とパイワン語の語彙的接頭辞の特徴の相違の原因を明らかにすることを最終目標としている。

(おおたに はるな)

## 統語論と失語症

岡田 理恵子

本発表では、失語症における統語障害について、臨床的観点と、言語学的観点から考察した。失語症における統語障害には伝統的に「失文法」と「錯文法」と呼ばれる症状があるが、その症状の差異や発症機序には世界の失語症研究史的にも論争がある。失文法はブローカ失語で、錯文法はウェルニッケ失語でよく認める症状と言われる。日本語の失語症による統語障害では2つの症状の差を、助詞の脱落・助詞の誤用という点で捉えてきている。しかし藤田・三宅 (1986) ではどちらの症状もブローカ失語・ウェルニッケ失語の両方で認めることから、失文法と錯文法は助詞の誤りが出る処理段階が異なるものであり、脱落か誤用かといった見た目の観点からの分類にはあまり意味をなさないことを指摘している。

このような歴史的背景から、Okada (2013) では、健常者の fMRI 研究と失語症の症例研究から、統語処理および統語障害の症状の差はそれに関わる脳領域の差異から説明できることを示した。また、菅野・藤田・岡田 (2022) では、健常者、ブローカ失語を中心とした非流暢性失語群、健忘失語などの流暢性失語群での助動詞の産生数を調査し、非流暢性失語群と流暢性失語群では助動詞に関わる統語的処理障害の有無という点が異なる可能性を指摘した。

本発表では、このように失語症の臨床・研究が進む中で、言語学の知識を失語症の研究・臨床にどのように活かしていくかという点が重要な課題であることを述べた。直接的に関われるのは、言語聴覚士を目指す学生への言語学の教育である。失語症の統語障害を理解するために必要な言語学、統語論の知識を、可能な限り臨床と結びつける形で教育する手法などが求められる。さらに研究的な観点でいうと、既存の統語論の理論だけでなく、失語症の失文法を適確に捉えるために必要なモデル・理論の構築にも携わっていくことも可能である。特に統語論と失語症との連携という点で、言語学と失語症学の発展が生まれるであろうことを述べた。

(おかだ りえこ)